

梅原末治著

殷墓発見木器印影図録

岡田芳三郎

安陽侯家莊西北岡の殷代大墓群が発掘され、立派な遺物が続々と出土して人々を驚かせてから、もう二十余年になる。しかし不幸な戦争のために貴重な発掘記録が散佚し、完全な報告は目下のところ望みうべくもないと云うことは何としても遺憾であるが、それだけに、残された材料をよく保存し、なるべく早く公けに紹介することがまた大切となつてくるわけであるが、梅原博士が本図録を公刊された意図——ひいて本図録がもつべき意義ということとは、まず第一にこの点にかかつていなければならぬと考へる。

「木器印影」といつても木質部はもちろん早く腐朽し去り、その上にはどこされていた鮮かな朱彩が刻文の形跡をとどめつつ膜状をなして残つている黄土塊のことであるから、これは極めてこわれやすい、あぶない遺物である。

記録によれば安陽の第十一次・第十二次の発掘において、大墓からこうした黄土塊が見出されたことが記されているが、中国側ではこれを「花土」と呼んでいる。ところが戦時中の一九二九年、南京に遺留放置されていた遺物の整理と保存とを学者の手で行なつてほ

しいという出先官憲の要請をうけて同地に向向かれた博士が、旧歴史語言研究所内で見出された遺物のうちにはこれらの黄土塊があつたので、博士はその重要性を思い、直ちにこの危ない遺物に保存処置を講じ、硬化法をほどこして一つ一つガラス蓋のついたケース内におさめることにされた。そのとき硬化法による変色の場合を懸念して原色写真をつくられたが、これがその時の調査研究と一緒にまとめ、本図録におさめられている図版である。この際、博士が手がけられたのは、すでに包装箱から取り出され、ちらかつていたものに限られ、まだ箱にはいつたままのものは中国学者を待つ意味において、手をふれずにおかれたが、その中にあつた一二一七号墓出土の太鼓（もちろん黄土塊となつている）など貴重な遺物は、今は全く失なわれてしまつていふという。もし博士の保存工作がなければ、おそらくこれらも同じ運命をたどつていたことであろうが、そうした工作時の貴重な調査記録が本図録であることを、まずあらかじめここに明記しておきたいと思う。

さて博士はこの木器の痕跡をとどめた黄土塊を精しく調査された上で、これを三種類にわけられた。その一つは大形で、面が平板状をなしているものであり、第二は台付きの皿形器（礼の器のうちで豆とよばれるもの）など、容器の形をとどめているもの、第三は蚌・骨の切片を朱彩の紋様のあいだに象嵌しているものである。

まずこの内の第一類から言うならば、それには復原すれば長さ二メートルをはかる虎を刻文であらわしたものの二面、復原形で幅六〇センチ内外の禽形紋を表わしたものの一面、復原形二メートルの虬龍絡紋を表わし、その長手の一辺は斜面になつていて、そこに巴形の

骨飾を配し、あたかも大形箱蓋の一部をなすかと思われるもの——の四点がある。これらの黄土塊は、発掘に参加した石璋如・高去尋両氏の談によると、侯家莊西北岡第一〇一〇一号大墓の木槨床上に平らな状態で遺存していたということであるので、梅原博士は実物の復原した大きさとも考えあわせて、或いはこれが木槨ではなかつたかと云う推測もできうるのではないかと述べられている。

戦後一九五〇年に発掘された武官村の大墓では、中央の主槨は盗掘にあらざれてわからなかつたけれども、それをめぐる随葬者の木槨は明らかに形跡をとどめているものがあつて注目をひいたし、また長安普渡村の周代葬墓でも木槨かと思われる板状の白色木灰が発見されている。しかるに戦前発掘された大墓では主槨の痕跡が一つもわかつていないのは、或いは盗掘のためかも知れないけれども、不思議なように思える。しかし武官村大墓の例によつて、殷代に木槨が使用されていたことは明らかであるから、もしこの大形黄土塊が木槨の部分とすれば、これは甚だ貴重な遺物となるわけである。

しかし一〇一〇一号墓などが発掘された第十一次発掘に参加している胡厚宣氏は、その著書「殷墟発掘」において、一二一七号墓西墓道より出た前記の太鼓、一五〇〇号墓西墓道より出た、いわゆる鳥飾・虎飾・虎飾など、注目すべき黄土塊の出土については頁をさきながら、一〇一〇一号墓についてはただ「石刻・雕骨・白陶・花土等物多出在這個墓裏辺」と簡単にのべたのみで終つていないのは不思議である。そして胡氏は、かえつて同墓の槨頂上で発見された花土についてやや詳しく述べ

「……在槨頂的一層、都發現送殯行列所用儀仗的痕跡。原物已全部

腐化、所余者惟原物上所塗的顔色、所鑲嵌的石片・蚌片・牙片・松緑石片以及所刻浮雕花紋的印痕。……保存最好的、還可以看出原物的大概輪廓、如旗牌・……」

と記しているが、胡氏が木槨床から出た黄土塊を、槨頂上から出たものと思いがいしたのではないことは、戦後発掘された前記武官村大墓の場合にも、槨頂上から同様な黄土塊があらわれたことによつて明らかである。そして胡氏をはじめ戦前の発掘者は、これらを儀仗と解しているが、武官村大墓の発掘報告者郭宝均氏はこれを「雕花塗朱の木板」とよび、槨頂をおつた後、その上をこのような花板で飾つたものと解している。郭氏の見解に従うならば、殷代木器にはまたこうした一類が存することを注意しておきたい。

次に梅原博士のあげられた第二類——容器の形をとどめた黄土塊であるが、石璋如・高去尋氏によれば、この類もその大部分は一〇一〇一号大墓から出たものであるという。武官村大墓でも、槨室上で石磬が出た場所から雕花木器印痕三個が見出されているが、その大きさは高さ大約四〇センチのものである。ただし木質腐朽してその器形はわからなかつたとあるが、梅原博士の精しい観察と実測によつて、南京所見の黄土塊から「豆」形器數個と、「觶」および「觚」かと思われる器形各一つを推定復原しえたのは、はなはだ貴重な知見である。

従来早くから言われていることであるが、中國古銅器の表飾には木彫・或いは彫骨を思わせるような要素を強くもつたものが見られる。しかしその器形は壺形・鉢形・鍋形・皿形など、いずれもそれに先立つ土器の形をうけつたものと思われるが、そうした土器の

上にはこのような刻紋は見られない。そこでかかる表師紋は、骨・牙あるいは木器の上でところみられていたものが銅器の上に加えられるようになったものかと考えられるが、殷代の銅器をしらべると、例えば円鼎に対する方鼎、鬲に対する方鬲というように、器の構成は同じプリンシプルに成りながら、プランは円に対して方形をとっているものが多数見られる。こうした方形のものが土器的でないことは言うまでもないが、ことに方彝の或るものの如きは木器さながらの姿をしている。したがって木器が相等発達しており、その影響が古銅器の上にもかなり強く反映しているのではないかと私は考えているが、そうした観点からいうならば、木器の実体がこのようにしてわかつてきたことには、甚だ興味をもたれる次第である。

しかしここで得られた器は方形プランのものではなく、豆形を主として、豆は殷代や西周代のおびただしい数にのぼる銅器の中では、実は至つてその例が少ない器形である。それに対して、白陶の中には古銅器同様の刻紋を加えた豆があることをすでに梅原博士が明らかにせられているが、今またそれに木器の豆の存在が加わることになつた。このように見ると、豆は青銅の質より木器・土器で作られる場合が多かつたのではないかという憶測もうまれてくるが、もちろんこれは将来の課題である。

さて次に梅原博士のあげられた第三類について言うならば、すでに先にのべた柳頂上から発見された「儀杖」と解されているものも

石・蚌・牙片を象嵌したものであつた。こうした象嵌用の小切片は、いわゆる花土の見出されていない葬墓でもおびただしく出土しているが、第十次発掘では侯家荘西北岡東区の一墓から、こうした牙師片が髹髹文様を形づくるように排列されたままの姿で発見されている例もあるから、朱彩は発見できなくとも、木器はさかんに作られていたものでなかつたかと考える。梅原博士も、容器のほかに、木彫物が作られていたのではないかという推測を述べられているが、そのように盛行した木器の影響が、古銅器の上にも反映しているのではないかと考えられることは先に述べた。

なおこの第三類の中にふくまれる黄土塊の中には、柱状をしたものがあり、その面は山形に区切つて、雷紋帯と、蚌を切つて作つた子安貝飾り三列とを交互に配しているものがある。これは前記一一一七号墓で太鼓とやらんで副葬せられていた髹髹をかけるための架の柱にほかならぬことを、李濟博士の著「中国文明的開始」に収められた写真によつて梅原博士はたしかめられているが、この一事は、南京で調査され、本図録の内容をなした木器印影の全体について、石・高両氏の証言にもまして、それらがどのようにして現われてきたものであるかという出自を示す最も有力な根拠となるものであることを、最後に特筆しておきたいと思う。

(A4判 本文二三頁 原色写真版十四 コロタイプ版十一 昭和三四年一月便利堂発行 一〇〇部限定版)